

教育現場の者として、子供にかかわる方々に紹介したい体験をした。

それは映像の展覧会だった。砂漠でチータと寄り添う少年、ゾウの足元で眠る少女、自然と人間が何の違和感もなく一体になっている。言葉はないのに「私たち人間もこの地球の一部なのだ」という思いが沸き上がり、一刻も早く生徒に見せたくなった。グレゴリー・コルベール氏の展覧会(「アッシュユーズ・ア・ンド・スノー」。6月24日まで東京・お台場のノマディック美術館で開催中)だ。米国では10万人の子供たちが訪れた。驚くことにすべての作品は一切加工されていない。鳥が少年の背後で翼を広げ、まるで天使のように見える作品があった。どうやって撮ったのか、コルベール氏に聞くと「動物とは心で感じ合う。何

品川女子学院校長 漆紫穂子



カ月もかけて少しづつ友達になる」と言う。今回の映像を撮るのに彼は15年の歳月をかけている。

うるし・しほ(東京都内の私立校教諭を経て品川女子学院で学校改革に着手。社会で活躍する女性の育成を目指す。昨年4月から現職。文科省新システム開発プログラム委員。)

うなもの。自然は直接触れなくては理解できないものなの「体験によって気づくもの」にそのチャンスがない。われわれは自然から生まれたのに自然を理解しないでどうして自分を理解することができる

ある時、稲穂を持って廊下を歩いている教員がいた。何を歩いているの?と尋ねると、「稲

体験によって気づくもの

ある人が「秘境で自然を堪能するには何日必要か」と聞くと「場所により時間は変化する。時間を敵と思っている人もいる。最短時間で動く社会を尺度にはできない」という言葉が返ってきた。

彼は言う。「都会の暮らしは地に足を付けずに生きるよ

ある人が「秘境で自然を堪能するには何日必要か」と聞くと「場所により時間は変化する。時間を敵と思っている人もいる。最短時間で動く社会を尺度にはできない」という言葉が返ってきた。

彼は言う。「都会の暮らしは地に足を付けずに生きるよ

だろ。か。日本人が自然に畏敬の念を持って接してきたように、自然を『資源』ではなく『共生するもの』としてとらえ直す動きを作りたい」「心の教育」が急務と、文科省からさまざまなテキストが送られてくるが、日々子供たちといて感じることは、心

をみたことがない子がいる」と言う。シヨックだった。自分の口に入るものがどんな形をし、どんな場所で育っているのか見たことがない子に「環境を大切に」と口で言うても心に響くわけがない。私たちの学校では中2の初夏に田植え、夏休みに農家民泊、中3の修学旅行でファームステイを体験する。そこには子供たちの日常と違う時間が流れ、自然とともに生きる人々との出会いがある。

「環境教育」と大上段に構え、心のあり方や暮らし方を押し付けるのではなく、自分が地球の一部であることに自然と気づくようさまざまな体験をさせていきたい。

教育

毎週水曜日掲載